

ACKU-2011.2.26:

豊田寿夫

北穂高クラック尾根遭難事故の概要

内容

1.1957年度山岳部活動の特徴と春山合宿の状況

2.北穂高滝谷クラック尾根の登攀と事故の概要

北穂高滝谷概要・登攀の記録他・遭難報告書への補足

3.思い出すこと - 昭和30年代前半のACKUの状況

学舎分散と部活動・パタゴニア遠征の強い刺激

4.高木部長の存在-先生の登山経験と山岳部の指導

(本レジュメは山岳部員の教育用に故水口L「山と人」第3号報告に基づき作成したもの)

1. 1957年度山岳部活動の特徴

1. 新入生と中堅部員の増大

夏山 集中(涸沢:BC)と分散(前穂・奥又白:AC)による2年生の中堅部員の早期戦力化

BC 24人 第1/2次AC 延8+5=13人

(注：滝谷のクラック尾根はBCより前田・東郷が登る)

2. 夏山の集中・分散方式を春山に持込む

3年部員の不参加者が増える中で、リーダーシップ要員(2 1人)の不足のまま当初の構想による春山入山

3. 集中後の合宿後半の状況

2年生中堅部員は縦走完遂で自信を得た。本隊での長距離荷揚げの疲労が回復した1年生の氷雪技術の急速な向上。
水口L+Yは前穂北尾根(5・6コルより) 余裕を持って登った。

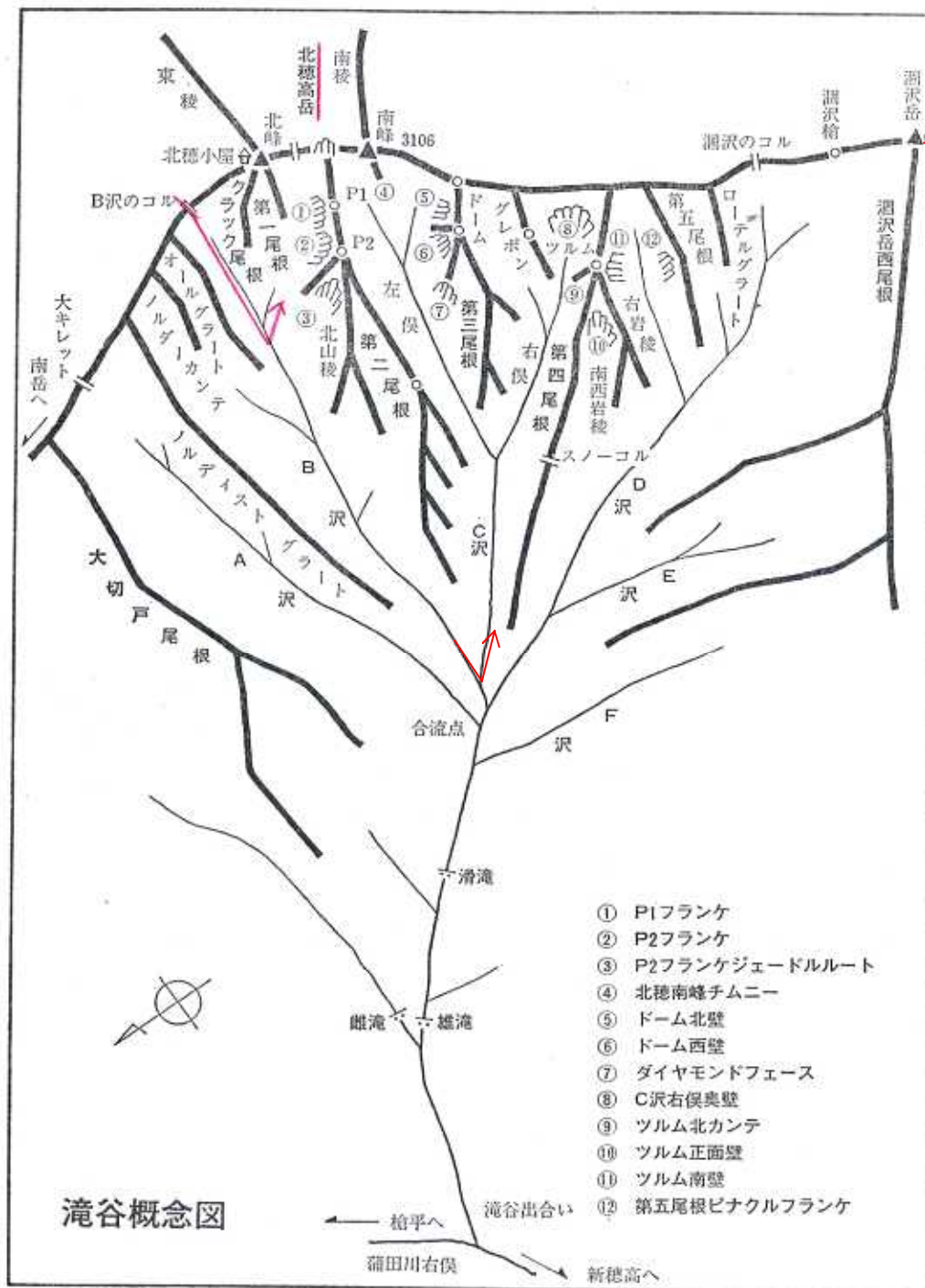
中堅部員のバリエーションルート志向が顕在化

1-1 穂高山系 概念図

本隊
水口L+Y
(1年4人)

西穂縦走隊
A+中家
明神縦走隊
斎藤・豊田



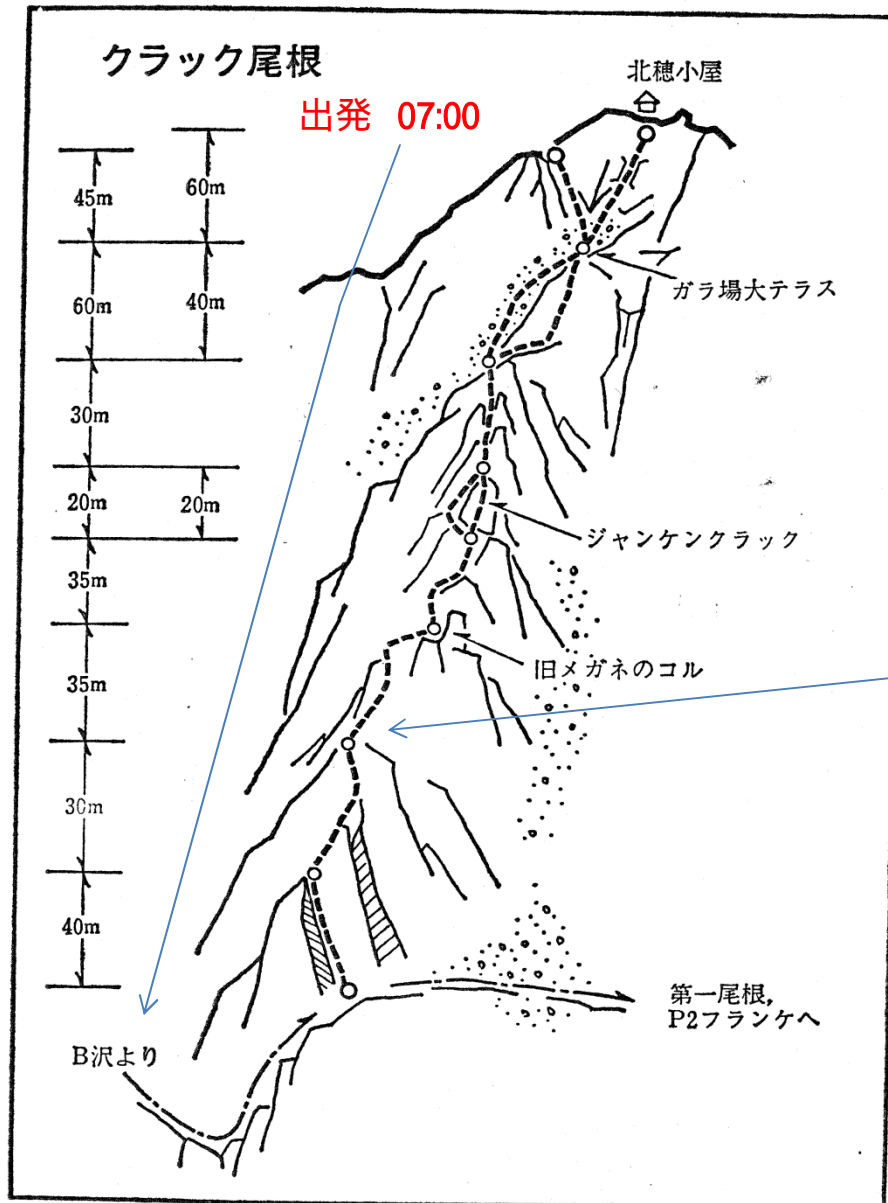


2. 北穂高滝谷クラック 尾根の登攀と事故

奥穂高岳へ
(集中後の合宿本拠地)

北穂高滝谷の概要
(1958年3月)

2-1 登攀日の行動と記録



クラック尾根アタック パーティーの行動

1958年3月28日

(注:赤字は
奥穂高で
の観測)

19:00 応答なし(A兄)
(天候は悪化・風雪となる)

17:00 A兄再びヤッホーを交す
(アイゼンのきしる音を聞く)

15:00 A兄ヤッホーを交す
(北穂頂上より/小雪降りだす)

13:00 眼鏡下1-2ピッチを登攀中
(H高OBが望見/晴天)

3月29日

A兄他クラック尾根上部を下降し、頂上から2番目のテラス(頂上より50m下)でパーティの到達した痕跡を発見.但し、人影は見つからず.

注)水口L報告書より
登攀支援体制の問題点

2-2 北穂滝谷クラック尾根登攀を含む春山合宿計画

- *この計画は、時期的にパタゴニア遠征と同時並行で進んでいた。少なくとも高木部長はこの計画はご存じだったのではないか。何か指導はなかったのか。...*

ACKUのOB(KT氏よりの質問と意見「いや、OBから何らかのアドバイスを受けたり、指導を求めなかったのではないか」

- 高木部長：(サンチアゴ帰着時)日本の新聞により山岳部部員2人遭難のニュースを知る “晴天の霹靂”(山と人3号p5高木正孝)及びパタゴニアから先発で帰着し、その時に同席したOB円満字氏談(その時の状況は同氏に再確認済)

2-3 クラック尾根アタックの決定

- この登攀プラン自体は合宿計画の中に当初からあった。しかし、現地での合宿最終段階で詳細を詰める過程でA+Yパーティーでの決行を水口Lが内定したもの(ただ、該当ルートの無雪期登山経験のないメンバーにまかせたことは同リーダーの反省点:山と人3号p64)。
- 水口Lの回顧と反省:A+Yは「今日は、B沢を下り偵察を行い、帰りはC沢をあがって来るかも知れない」云い残し、07:00に出て行った(山と人3号p62/p67)
水口Lは当事者の熱意にほだされてクラック尾根登攀に同意したが、内心は“ 滝谷の偵察をし、条件が許せば取りつく ” 程度の腹ずもりではなかったか(山と人3号p66)
- A+Yはクラック尾根アタックのため、北穂に向かって出発するも、途中で撤収してきた豊田他3人に出会った時、ハーケンの不足を聞き、Y独りで穂高小屋に取りに帰ってきた(14.30-15:30/山と人3号p58)

この時の涸沢岳近辺で出あったYの印象

2-4 春山計画の特徴

あの山行は「分散から集中 再分散」という形式をとったため、前半は2年生4人が各パーティーの中核メンバーとして分散行動をした。集中後もそれぞれのザイルパーティーに1年生4人を一人ずつ組み込んで行動しなければならない状況であった。したがって、我々2年生2人もA・Yとは奥穂・北穂に分かれての別行動が多く、どの時点で、あのような登攀につながるプランが最終決定されたのか判然としない部分がある。

3年部員が2名しか参加せず、かつ合宿後半にはサブリーダーも体調不調となった。このためリーダーシップの要員は実質的に水口L一人となり、3月26日の再分散にあたっての3人(水口L/A+Y)の話し合いで計画実行の判断を大幅にA+Yにまかせたとも考えられる。

[参考]クラック尾根アタックまでの積雪期主要登攀歴

A + Y: 1957年11月15日 北穂滝谷第一尾根完登(秋山合宿後の個人山行扱い)

A: 1958年3月 西穂 奥穂縦走 Y: 同春山合宿前半 前穂高北尾根

2-5A 登山装備面よりの問題点(山と人3号p65水口L反省2.)

- ・米軍放出のナイロンロープ(11mm/迷彩色)を2本購入して合宿に持ち込んだ(縦走隊の強い要望:同p80).使用目的は西穂・明神両パーティーの装備類の軽量化と凍結対策であった.縦走路での使用に限定されていた(同p65).ところが,その利点のみ心を奪われ,利便さからクラック尾根登攀に使い,結果的には切断していた(Aより2-3mのところ,端は約30-40cmほぐれていた同p62).

「ザイル問題は究明中・追って報告」(山と人3号編集後記/未報告)

- ・当時は「高木部長によって、ナイロンザイルの性能がはっきり確定されるまで,その使用が禁じられていた」とのことであるが,この指示はリーダーシップには伝達されていなかった(山と人3号p65).*ACKUのOB・KT氏よりの質問と意見*「当時部内ではどんな話し合いがなされ,クラックで使用するについて何の議論も躊躇もなかったのか」



なお,ロープ撚り込み紙片から製造メーカー(米国)が特定問合せができた

2-5B 登山装備面よりの問題点[参考]

- 1955年1月2日に発生した三重・岩稜会の前穂高東壁墜落事故とそれをモデルとした井上靖の「氷壁」(1956年11月から新聞連載開始)などでも合繊ロープ問題は取り上げられ、問題だったことはみんな知っていたはず。ただ、当時のJAC山日記もナイロンロープの問題点を正確に指摘していたわけではない(岩稜会は1956年6月23日製造元東洋製鋼の実験に基づき'56山日記に「ナイロンザイルは90°の岩角にはマニラ麻の4倍以上強い」と発表した阪大篠田教授を訴えた。以上朝日新聞記事「昭和にんげん史」1988.7.25)。
- なお、このナイロンロープの切断部は、豊田が工学部の接写写真機を借りて撮影した。写真は米国の製造メーカーに送り、カタログ等の基本使用は入手できた。また、鈴鹿高専石岡繁雄教授(岩稜会の前穂高遭難者は同氏の実弟)に鑑定を依頼した。特に、参考となる科学的な詳細意見は得られず。これらの関連情報は水口L「装備の面より見たる反省」には反映されていない。

3. 思い出すこと - 昭和30年代前半のACKU状況

1) 学舎分散と部活動

姫路分校部員が放任されていたこと・雪彦山の問題 高木部長の問題
点の指摘(山と人3号p3)及び「岩場の考察: 3. 姫路の岩場の特性」(同4号p37).  

‘58年度より「山岳部例会に分校代表の参加・六甲合同トレ

2) パタゴニア遠征の強い刺激 →

1957年10月遠征用品の梱包手伝い(海外の山が身近になったことの実感・中堅部員に強烈な刺激をあたえた).

3) 高木部長の存在 - 先生の登山経験と指導

欧州アルプス・マナスルでの華麗な山歴 - それらに目を奪われるも、先生の谷川岳等での氷雪期登山の経験の真価を分かっていたOB・部員は少なかったのでは。先生が遠征のため不在で、リーダーシップが春山計画について意見を聞くことができなかったこと、登攀を目指す中堅部員が相談にのってもらい、直接アドバイスを得られなかったことが悔やまれる。

(‘61年8月谷川岳でのOBの指導)

4) その他 「登山学校」・「監督団」etc (別項)

本春山合宿は、より困難な登攀を求める中堅部員の扱いが難しかった事例である。

3-1A 学舎分散

(姫路分校の山岳部活動)



1-2年生の御着
の岩登り '57.5

3-1B 姫路分校 の活動

寮からトレーニングへ(続き)

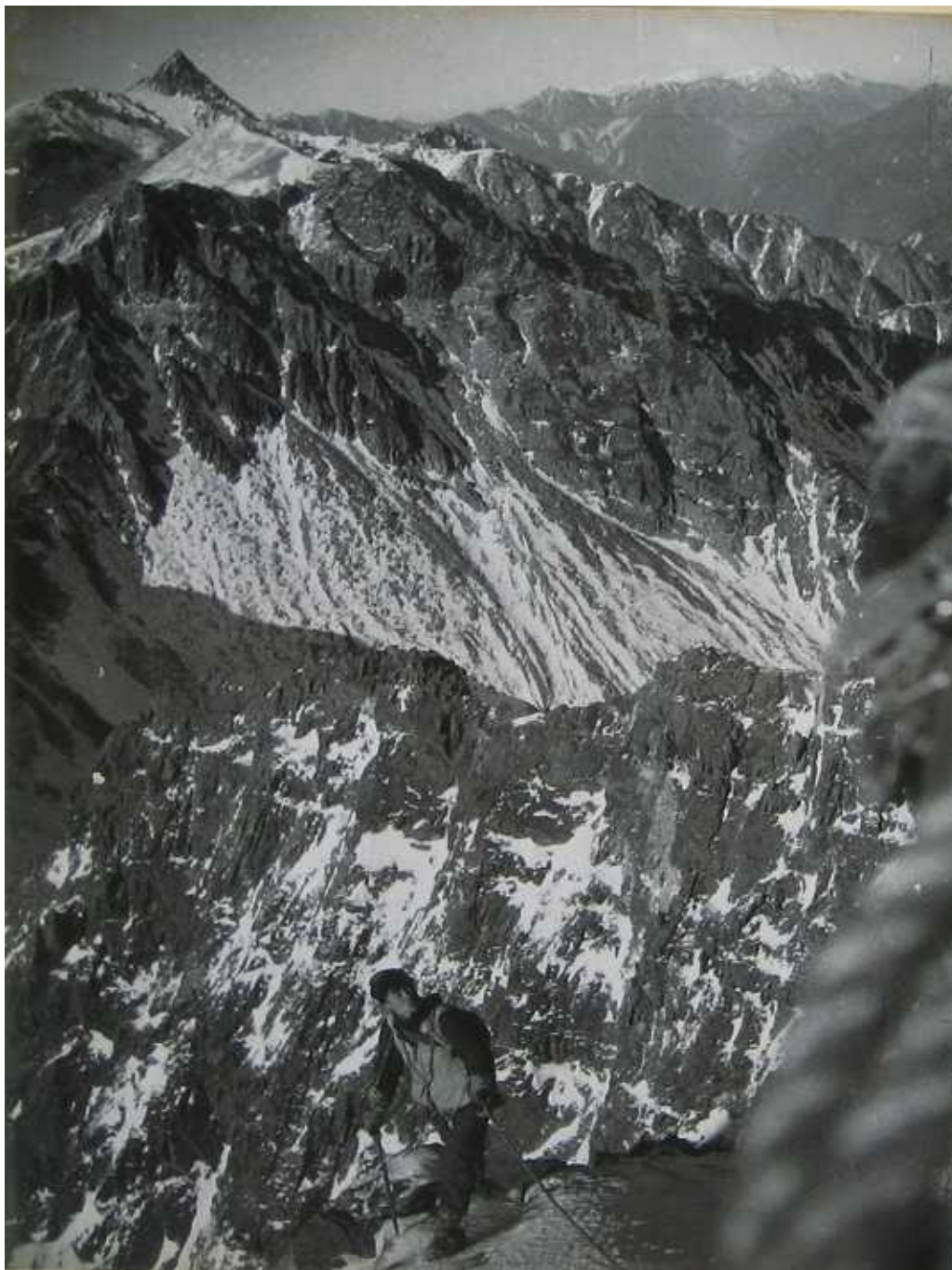


(専門課程進級 '57.9/E)

3-2 パタゴニア遠征の強い刺激

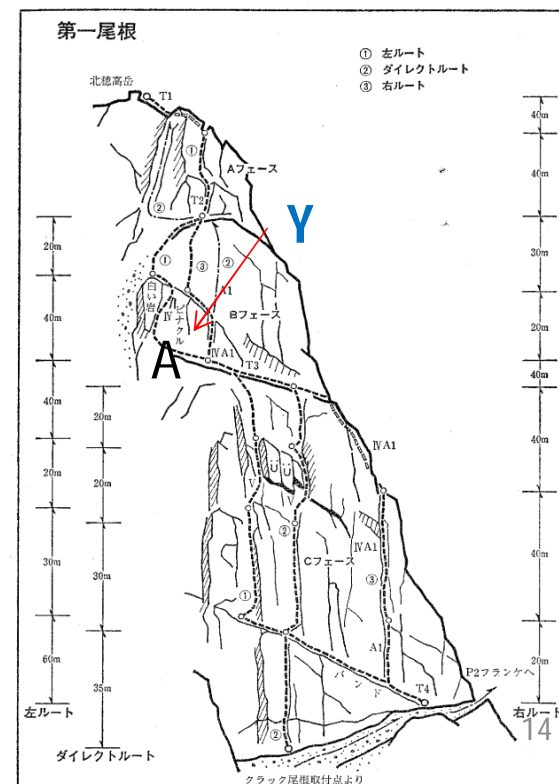


(装備梱包手伝'57.10/ 11月5日先発隊高木他出発)



3-3 中堅部員 の活動(秋山 滝谷第1尾根)

(推定図 '57.11.15)



4 山岳部長故高木正孝先生

1944 頃



4-1 谷川岳 - 高木先生の山歴とOBの指導(1961年)

8月8日(火) 28年3月9 隣の古蹟。
一、倉 = 才2ルニセ = Sattel 同ニ =
滝沢上野 13ルニセ
登攀
 Party = 高木正寿 chaka (踏高会) 神戸大学山岳会。
 金井健二、川口俊平、望田寿夫、中家章、以上4名。
 山の会、山岳会、山岳会。

一の倉
滝沢
(8月8日)

(成蹊・虹
芝寮誌：
居谷撮影
08年6月)

ザッテル

ニルンゼ

三ルンゼ(豊田・坂本'62.8)

4-2 谷川岳 一の倉沢

滝沢上部

烏帽子沢奥壁

中央カンテ(前田・鷲尾)

チムニー・右(中家・山上)

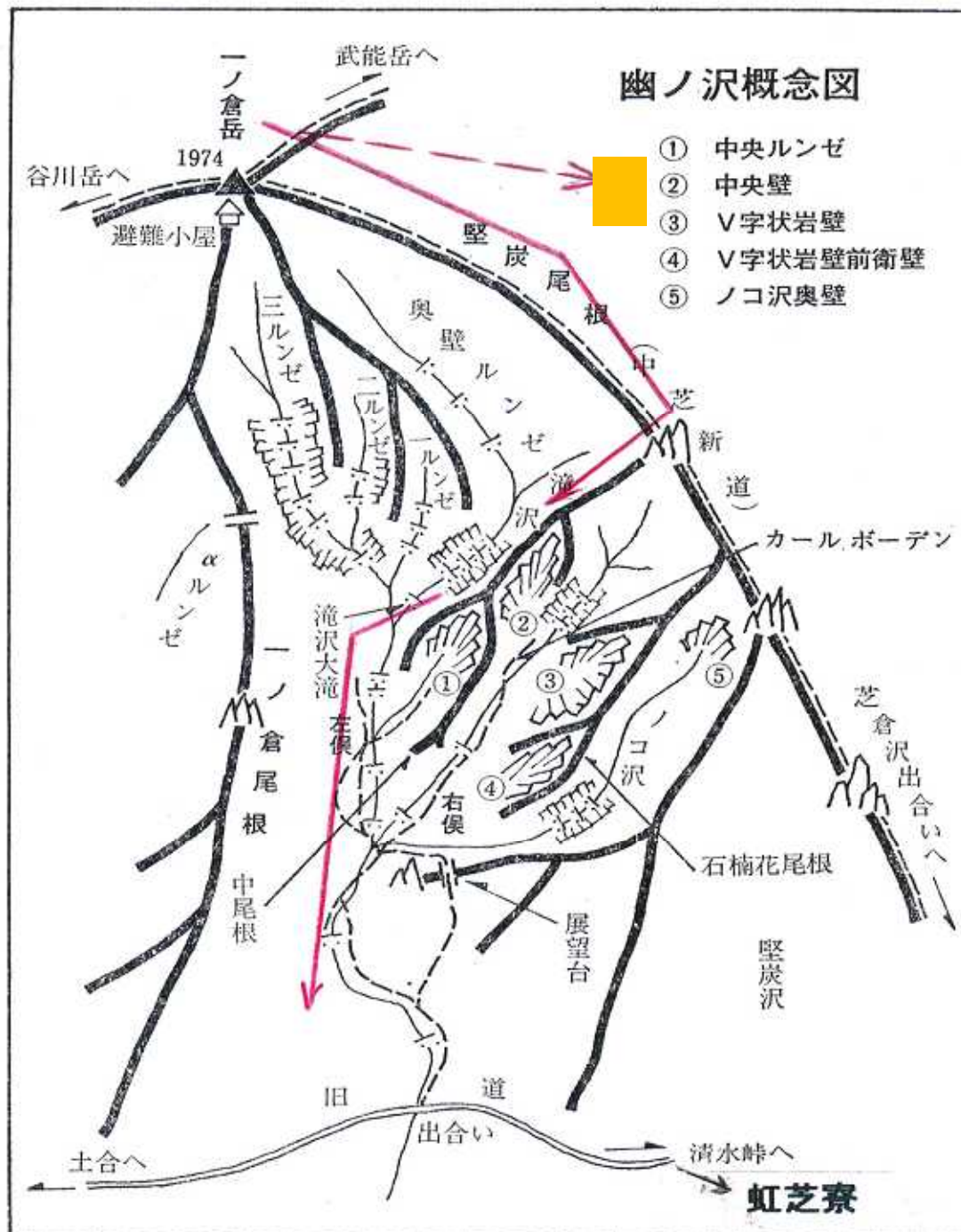
南稜(氷口・東郷・鷲尾・高田他)

OB・現役合同合宿
(上級部員育成)
1962.8.12-19

滝沢
下

(関東OB合宿'08.6.1)

一の倉沢出合と本谷(四ルンゼ:東郷・中家・山上・高田)

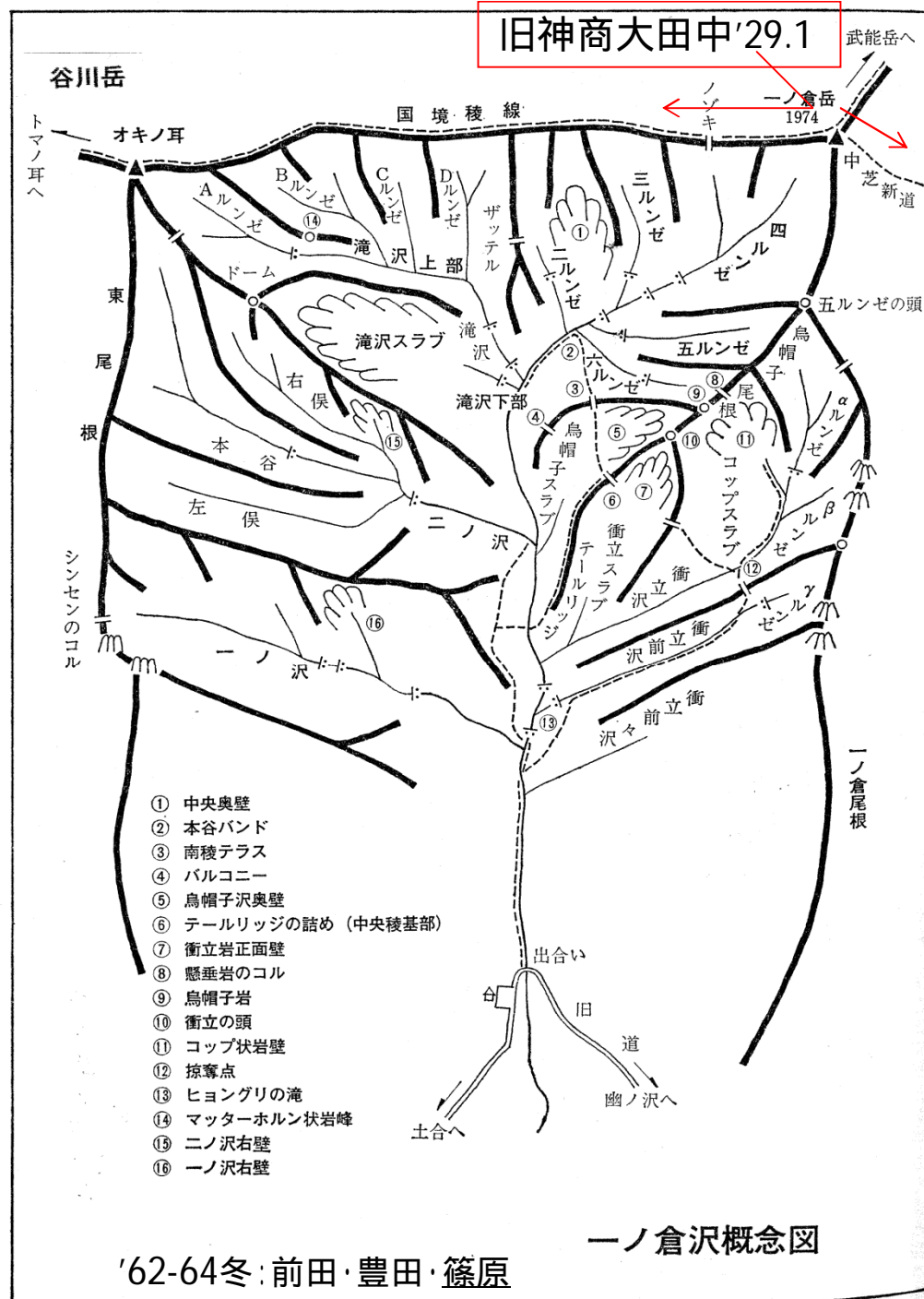


4-3B 12月29日 (吹雪幽の沢に迷込む)

一の倉岳から芝倉沢に下るも頂上を過ぎたあたりで堅炭尾根に迷い込み、板状雪崩に流される(17:00にビバーク/一時越後・茂倉谷と勘違い). 幽の沢左俣大滝の直上にいたため、再度はたき落された. そのあと雪中を下山を続け湯檜曽谷でスキーシュプールを発見し、夜中に帰寮.

(記録: 高木)

(: 前冬の一の倉登攀時帰路)



4-4 谷川岳 一の倉沢 全体図他(参考)

一の倉滝沢登攀前・後史(高木関連)

('32成蹊学園虹芝寮完成)

- 1932年夏本谷テラスより2ルンゼを登り、ザッテルよりの滝沢への抜け道を確認した後、そのまま直登・国境稜線へ
- 1933.3.25 谷川岳一の倉本谷(積雪期) 高木正孝・渡邊他1人 虹芝寮出発 03:30 一の倉に入り本谷(4ルンゼ)の二の沢出合より氷化した滝を登る.11:30 一の倉岳主稜に取り付き12:00頂上、芝倉沢を下り15:30寮帰着
- 1933年7月高木兄・慈医大パーティーニルンゼから滝沢に入りC・D中峰を完登
- 高木正孝・渡邊兵力同月同じニルンゼ・ルートをたどり、滝沢Bルンゼを初登
- 1934年3月高木文一・正孝兄弟滝沢下部を直登、あと雪崩を避けて退却²⁰